

# 令和4年度 第2回 中央区保健医療福祉計画推進委員会 「地域福祉専門部会」 会議記録

●日時 : 令和5年2月8日(水) 午後6時30分～8時15分

●場所 : 中央区役所8階 大会議室

●出席者 : 【委員】 12名

部会長 和氣 康太(明治学院大学社会学部教授)  
職務代理者 川上 富雄(駒澤大学文学部教授)  
鈴木 英子(中央区民生・児童委員協議会(京橋))  
津田 章(中央区民生・児童委員協議会(日本橋))  
早乙女 道子(中央区民生・児童委員協議会(月島))  
松見 幸太郎(NPO法人キッズドア)  
片桐 義晴(中央区社会福祉協議会)  
當山 貴子(おとしより相談センター)  
島田 有三(基幹相談支援センター)  
安西 暉之(日本橋地域町会連合会)  
田中 智彦(福祉保健部長)  
北澤 千恵子(福祉保健部高齢者施策推進室長)

## 【事務局幹事】

植木 清美(福祉保健部管理課長) 石戸 秀明(子育て支援課長)  
石井 操(生活支援課長) 岡田 純(障害者福祉課長)  
須貝 百合(子ども家庭支援センター所長) 早川 紀行(高齢者福祉課長)  
阿部 志穂(介護保険課長) 平川 康行(区民部地域振興課長)  
岩田 純治(文化・生涯学習課長) 岸 雅典(社会福祉協議会管理部長)

●傍聴人 : 0名

## ●議事次第

- 1 開会
- 2 部会長あいさつ
- 3 議題
  - (1) 重層的支援体制整備事業の実施に向けた取り組みについて(参加支援事業及び地域づくり事業の検討)
  - (2) 地域福祉ワークショップ実施状況と今後の展開について
  - (3) 令和5年度地域カルテの更新について
- 4 閉会

## ●配布資料

資料 1	重層的支援体制整備事業の実施に向けた取り組みについて（参加支援事業及び地域づくり事業の検討）
資料 2	地域福祉ワークショップ実施状況と今後の取り組みについて
資料 3	令和 5 年度地域カルテの更新について
資料 4	意見票 ※当日配布
参考資料 1	地域福祉専門部会委員名簿
参考資料 2	座席表
参考資料 3	中央区保健医療福祉計画推進委員会設置要綱
参考資料 4	令和 4 年度第 1 回地域福祉専門部会議事録 ※当日配布
参考資料 5	令和 4 年度第 1 回地域福祉専門部会意見票のまとめ ※当日配布
配布資料	中央区サロンマップ ※当日配布

次第	発言者	議事の状況又は発言内容
1 開会	職務代理者	<p>開会</p> <p>部会長より遅参の連絡があったため、中央区保健医療福祉計画推進委員会設置要綱第10条に基づき、部会長到着までの進行を務める。</p>
2 部会長あいさつ	職務代理者	開会のあいさつ。
(傍聴の確認)	職務代理者	傍聴希望者について確認。
	管理課長	傍聴希望なしの旨を報告。
(配布資料の確認)		配布資料を確認。
3 議題		
(1) 重層的支援体制整備事業の実施に向けた取り組みについて(参加支援事業及び地域づくり事業の検討)	職務代理者	<p>議題(1) 重層的支援体制整備事業の実施に向けた取り組みについて(参加支援事業及び地域づくり事業の検討)、説明を求める。</p>
	管理課長	資料1について説明。
	職務代理者	<p>令和元年に社会福祉法が改正され、重層的支援体制整備事業に各自治体が手上げにより取り組むことになった。令和2年度から事業を開始し、約3年が経過した中で多くの自治体が事業実施に向けた準備を進めており、中央区でも令和6年度の開始を予定している。</p> <p>本事業は、資料1のP.1を見るとわかるように、イメージ図の①相談支援、②参加支援、③地域づくりに向けた支援、この3つの取り組みを展開するものとなっている。①の相談支援は総合相談、当然話を聞くだけでは意味が無いので、解決に向けた連携システムの確立、相談窓口を設けるだけでは相談者は来ないため、アウトリーチによりニーズをキャッチする取り組みも含めて相談支援としている。</p> <p>参加支援は、社会的孤立を無くすための取り組みだが、社会参加の方法は人それぞれ異なるため、要援護者のニーズに沿った形で一般就労から福祉的な就労、あるいはボランティア活動のような参加の仕方、居場所のようなところに通うことも考えられるし、これら以外の参加のあり方もあるだろう。</p>

これらを担う人材として地域住民、地域に対し非常に大きな役割が期待されているが、無縁社会が進む中で地域コミュニティの崩壊、地域における人間関係の希薄化が進んでいる状況でもあるため、地域づくりに向け今一度丁寧に、住民同士の関係づくりに向けた支援などを行うという、大きな3本の柱で本事業が始まろうとしている。

本日は具体的な事例、あるいは中央区で既に取り組んでいる様々な事業名を挙げてここにはめ込みたい、こういう取り組みを行いたいという説明を伺った。説明を受け、重層的支援体制整備事業の実施に向けたご意見を賜れればと思うが、これまで②参加支援、③地域づくりに向けた支援の部分が十分協議を掘り下げてこなかったため、②③に軸足を置きながら、気づき、感想、思いを聞かせていただきたい。

委員 ③の地域づくり事業について、資料1のP.6(3)の実施事業案は、決定ではなく案なのか。それともこの内容で決定なのか。

管理課長 必須事業はこの内容で行うこととなっているが、必須事業以外のものは決定ではない。これら以外の事業についても、今後検討する。

委員 すぐにといいわけではないと思うが、地域づくり事業として実施した方が良く考えたこととして、まず1つは、先日参加した地域福祉ワークショップについて、同じグループの私以外の参加者の興味は防災にあった。60年、70年と長い間中央区にお住まいで地域の中で生まれ育った方たちが、地域の防災を大変心配し、関心を強く持っているということを実感した。そのことから、人と人がつながりあうための支援の中に、防災が入ってもよいのではないかと。資料1のP.1の図では、「その他」に該当すると思うが、防災は一つテーマとしてあっても良いと感じた。

2つ目は、比較的孤立しがちで、理解がなかなか得られていない領域で、障害をお持ちのお子さんを育てる保護者のネットワークが挙げられる。お子さんが将来地域の中でどのように生きていくか、大人になったときにどのように地域につながっていくかは見えにくいので、こちらも一つのテーマとして設定し、コミュニケーションを取る中で、「こういう状況もある」「こうしたところにつながっていけるのではないかと」などと考えら

れると良い。また、小学生、中学生、高校生を経て就労する方が多いと思うが、就労した際に地域のどのようなところに就労していくのか、という点についても、イメージが湧くようなワークショップやつながりが得られる場があると良いと感じた。

職務代理者 事務局いかがか。

管理課長 後ほど議題(2)でも話をするが、今回の地域福祉ワークショップは前回のアンケート結果を踏まえ防災をテーマとしたところ、参加者は自分事として防災を考えていると感じた。こうした点も踏まえ、中身を今後考えていきたい。また、障害児の親子のネットワークも一つのつながりであるため、どのようにつながるかは各担当部署におけるつながりも考慮し、資源の一つとして活用できるか考えたい。

職務代理者 協議の途中ではあるが、部会長が到着したため以降の進行は部会長にお願いしたい。

部会長 引き続き協議を行う。ご意見、ご質問はあるか。

委員 相談に来られる方はまだ良いと思うが、この2～3年の間で孤立・孤独化が進み、自ら相談に来られない方もいる。閉じこもりがちな地域住民に対しどのように手を差し伸べるか、サポートしていくかを考えなければならない。一番大切なのはアウトリーチであり、地域福祉コーディネーターの活動の一つであると思うが、現在の社会福祉協議会における地域福祉コーディネーターの動きを見ていると、はまる一むや勝どきデイルームで実施しているちょこっと相談会などで忙しそうにしており、地域に出て来れない感じがする。今後地域福祉コーディネーターの人数を増やすのかなど、体制強化について社会福祉協議会の考えを知りたい。

もう1点、地域活動の拠点について、地域の居場所づくりを行おうとしても活動場所を確保できない。この点について、福祉保健部だけでなく区全体で取り組む体制を作っていただきたい。思いがあっても場所がないとなかなか行動に移せないところがある。京橋地域の居場所づくりについては、この先どうなるのかと思っていたが、来年度の地域福祉専門部会の議題にその件が挙げられる予定とわかり、少し安心した。

最後にもう1点、アウトリーチにより意見を聞く中で、先ほ

ど委員から障害者の話があったが、高齢者や子育てのサロンだけでなく障害者のサロンも必要ではないかと障害当事者から言われた。障害の有無に関わらず、地域にそうした場を作っていくことも考えていただきたい。

部会長

事務局いかがか。社会福祉協議会の体制強化、福祉保健部に限らず区全体の問題として活動場所の確保、3つ目に障害者のサロン。よく言われることだが、子育てと高齢者のサロンはあるが、障害者のサロンが無いという点にいかに取り組むか。

社協管理  
部長

大変前向きなご意見ありがとうございます。地域福祉コーディネーターについて、現在日本橋浜町のはまる一む、勝どきの勝どきデイルームに拠点を設け、そこを相談の拠点としている。決してそこにいらした方だけに職員が対応しているのではなく、そこで色々な地域の方から聞いた話をもとに、近隣に出向いている。拠点で相談を待っているだけではないということは誤解のないようにお伝えしたい。

社会福祉協議会の体制強化については、地域福祉コーディネーターを増やせば当然アウトリーチの強化につながると思うが、限界もあるだろう。先進的な地域を見ていると、地域福祉コーディネーターが拠点にいるが、地域住民と共に拠点を運営する中で徐々に相談機能を地域住民が担い、困難ケースに関しては地域福祉コーディネーターが後を引き継ぎ、専門的な支援機関につなぐ事例もあると聞く。中央区は人口が増加傾向にあるため、それに合わせてコーディネーターを増やすことは現実的には厳しい部分があると思う。社会福祉協議会はもともと住民参加型の取り組みを主として行っているため、将来的にはこうした形で進めていくのが理想なのではないかと思っている。

拠点に関しては、配布資料のサロンマップにおいて、対象者ごとのサロン、活動拠点を一目で見てわかる形のものを4～5年前から作成しているが、まさに地域づくり事業の最初の一手になっていると思っている。このサロンマップを活用し、対象の異なるサロンや居場所の活動が、横でつながっていく仕掛けを社会福祉協議会でも取り組んでいく必要があるのだろう。また、区の空きスペースにも限りがあると思うので、既存のこうしたサロン活動をうまく重層的支援体制整備事業の趣旨に沿ったものにコーディネートしていけると良いと考えている。

障害のある方のサロンについては、社会福祉協議会ではさわ

やかワーク中央という就労継続支援B型事業所を運営しており、先週の土曜日にいわば参加支援事業の先駆けとして地域の方であればどなたでも参加可能な「ちょこっと相談会」を初めて開催した。障害の有無に限らず、本来であればB型事業所の利用者にはならない方も気軽にお越しくださいと案内して実施した。参加支援事業については、中央区にある既存の施設や場を使い、本来事業の対象にはならないような障害の方が、何かしらの活動ができるような取り組みを目指していると思っている。例えばポケット中央など、利用者は精神障害者だが、ひきこもりの方や知的障害の方にもプラスに作用すると個人的には思っているので、障害の種別を超えてつながっていく参加支援の取り組みが進むと良いと考えている。

部会長                    ありがとうございます。他はいかがか。

管理課長                区の施設も限りがあるが、福祉保健部だけでなく、区全体で考えていきたい。現在区役所の地下に活動拠点を設置する予定で、社会福祉協議会と共に検討しているところである。地域で活動をしたい方の支援ができればと考えている。

委員                     東京都の民生委員の会合に参加すると、地域福祉コーディネーターを増員している自治体は多いが、増員ただでコーディネーターの質が上がっておらず、コーディネーターを育て上げることが民生委員の仕事になっているという自治体もあった。地域のことをあまりよく知らないコーディネーターもいる。あちこち取材に行き Facebook（フェイスブック）に報告記事を掲載するだけではなく、もう少し地域の仕組みづくりに関わる活動をしてほしい。

部会長                    ご意見として承りたい。ただ人を増やせば良いのではなく、質を上げていく。なおかつ、継続して質が上がっていくような仕組み、バックアップシステムが必要とされている。数年で人が変わるようでは社会福祉の技術は伸びないため、できるだけ確保、育成、定着という方向へ向かって欲しいということかと思う。そうすると技術も上がり、地域にコミットメントすることもできるので、今のご意見のような期待に少し応えられるのではないか。

他にはいかがか。

(2) 地域福祉ワークショップ実施状況と今後の展開について

委員	防災の話になるが、私どもの地域は住民が非常に少なく、民生委員や消防団、ふれあい福祉委員会の委員らが防災の委員も務めているが、意思疎通は十分にできている。意思疎通ができていないと、防災は成り立たない。
部会長	防災は一つ、地域づくりのきっかけとなるだろう。
部会長	議題(2) 地域福祉ワークショップ実施状況と今後の展開について、事務局より説明を求める。
管理課長	資料2について説明。
部会長	ご質問、ご意見はあるか。
委員	<p>1月25日に月島社会教育会館で行われたワークショップに参加した。前回と同様に時間は10時半からで、14名が参加した。4グループに分かれ、特に今回は防災をテーマに話し合ったがすごく関心の高いテーマだったと感じた。</p> <p>ただ、その場限りで終えてしまうのは少し残念である。前回もそうだったが、ワークショップに参加して自分は何をしたかなど、継続した意見交換ができたかと思っている。</p> <p>もう1つ、若い人たちの参加についてである。私は地域の防災会議にも参加しているが、中学生、高校生は年配者から見たらすごく力を持っているので、そうした若い人が参加できるような場を作ってもらえないか、と話題に上がっていた。先ほどの説明で、若い世代が参加できる場を設けるとの話があったので、非常に良かったと思う。</p> <p>最後にワークショップを通して感じたことだが、自分の地域にも中学生や高校生はいるが、接点がない。例えば、防災への意識を高めるための防災グッズを渡して「お手伝いをしてもらえないか」などと伝え、子どもたちにも参加してもらえる場面を作らないといけないと感じた。自分たちだけが参加するのではなく、少しずつそ野を広げていきたい。</p>
部会長	その他の参加者からも意見をいただきたい。
委員	先ほども申し上げたが、ワークショップのテーマは何でも良く、今回のテーマが防災だったため防災にフォーカスしたが、委員も指摘していたように地域によっては若者の参加が少ない

ことが課題との話があった。他にも、会社が多く災害時の避難場所は高層ビルと決まっているが、そもそも高層ビルに入ることができない。どうすべきかなどの議論が交わされた。

地域ごとにそれぞれ心配事があり、その心配事が解決される道筋が見えないため議論は心配事と困りごとの共有で終わってしまう。それが、今回ワークショップの全てだと感じたところである。続けて質問も良いか。

部会長

どうぞ。

委員

P.2の課題の中で、気軽に参加してみたいと思えるテーマ設定が必要という話が載っているが、募集告知はどのような経路で行っているのか。

管理課長

チラシを作成し公共施設に置くほか、区のおしらせやホームページに掲載している。

委員

デジタル化が進んでおり、特にこれから実施しようとしている中高生向けのワークショップにおいては、中高生はデジタルネイティブなのでデジタル的な告知が必要になってくるだろう。中でもLINE（ライン）の活用が大きな役割を持つのではないか。私は中央区のLINEを登録しているが、必要な情報があまり入ってこない。また自ら情報を拾いに行くが、必要な回答が得られないと少し残念に感じている。

他の自治体ではLINEの機能がとても充実していて、区報が発行されるとLINEで配布したり、区報に掲載されたイベント情報は、同時にLINEで募集したりしている。そこまですると目に入ってくるし、内容もしっかり確認する。魅力的なイベントがたくさんあり、その自治体の住民ではないので参加できないのが残念だが、そうした周知方法に共感する人は多いのではないか。私の世代でもそうなので、私よりも1世代低い子育て世代ど真ん中の方たちはSNSの活用頻度も高いだろう。中高生向けのイベントを行うときも中高生にLINE登録をしてもらうことを今から案内しておけば、情報をきちんと取れると思う。こうした周知方法により、イベント情報は広がりやすくなる。東京のど真ん中にある中央区だからこそ、先進的に取り組んでもらい、こうしたワークショップにも技術を活かしてほしい。検討段階だとは思いますが、そのように考えている。

部会長	<p>非常に貴重な意見をいただいた。前半は1月25日の様子についてだったが、後半はいかがか。もう少し情報戦略を考えないと、これまでどおりのやり方では固定化されたメンバーしか来ないため、行き詰まってしまうとの話には私は聞こえた。</p>
管理課長	<p>ワークショップの広報について、今年度は区のLINEに投稿し、Twitter(ツイッター)にも掲載したが、実際どのくらい効果があったのかはわからない。中央区のLINEは活発ではないとの指摘もあったが、それ自体の活用方法は区全体で検討すべき事項である。中学生が一人一台タブレット端末を使用している状況も踏まえ、デジタル化の視点も考慮した上で中高生向けのワークショップの周知方法を検討していく。</p> <p>若い方にどのように参加を促していくかについては、色々なイベントに関して言えることであり、今後考えていく必要があると思っている。</p>
部会長	<p>他にはいかがか。</p>
委員	<p>日本橋のワークショップに参加した。防災とかお祭りなど色々な話が上がっていたが、最終的に人と人とのつながりが一番大事だという結論になった。発災時、公助はなかなか手が届かない。先日のトルコのような地震の場合、近所付き合い、人と人とのつながりを大事にしていけないとうまくいかないだろう。</p> <p>話は変わるが、少し前に新聞記事でカレーショップの記事があった。カレーは1食500円だが、余裕のある人は1,000円を出す。そうすると500円の券をもらえる。それを表にあるカレーショップの掲示板に貼っておく。そうすると子どもたちはその券を取り、店員に渡すとカレーを出してもらえる。子ども食堂ではないが、良い仕組みだと思った。</p>
部会長	<p>カレーショップの事例は非常に大切な指摘である。トルコの大地震は1,000年に一度と言われるぐらいの特殊な例ではあるが、あれほどの規模になると、かつての阪神・淡路大震災の時もだったが普段のシステムは機能不全を起こしてしまう。そのため、他のシステムを導入しない限り対応ができず、中央区だけで解決するのは難しいが、その基盤には人と人とのつながりが欠かせない。つながりをいかに構築するかというところで、カレーショップの事例は興味深い。大人から子ども、そこからさ</p>

らに次の展開があるとつながりが広まるのではないかと感じている。

講師を務めた委員からも意見を伺いたい。

委員

先ほどご指摘いただいたように、私自身も進行役をしながら痛切に感じているのは、毎回課題を出し合ったところで終わってしまい、その先につながらず残念な点である。今回フォローアップの取り組みを行うとの提案があり、ありがたく思っている。

ただ、京橋、日本橋、月島の各地域で参加していたメンバーが、引き続き顔を合わせ、2カ月後に話し合ったり、また4カ月後にも集まるような感じで小地域で継続的に話し合っていく関係づくりができればよい、その仕掛けを社会福祉協議会などを中心にできないかという思いも持っている。

部会長

ありがとうございます。その他はいかがか。

委員

課題の共有で終わってしまいその先につながらないのがワークショップの限界だと思う。フォローアップにより課題を出し合うのではなく、その先どのように地域の中で仕組みづくりに取り組むかは、このワークショップに関わった人たちで区に提言、できれば社会福祉協議会が先頭になってやって欲しいと思っている。そうしないと、参加者の不満が残ってしまうのではないか。

もう1点、若い世代と中高生の参加に関して、ワークショップをはじめ地域福祉の取り組みに、PTA や家庭教育推進協議会などを活用できないのか。先日、防災拠点運営委員会で防災訓練を行った際に、PTA 世代の方が小学5～6年ぐらいの子どもを連れて参加しており、高齢者が手間取っているテントの組み立てなどを簡単に行っていた。PTA 世代ともう少しつながり、地域福祉、まちづくりの視点からみんなが住みやすいまちにするにはどうすれば良いか、福祉保健部を超えて区全体で考えていけると良いと思っている。また、社会福祉協議会は点字や手話、車椅子などの福祉体験講座を行っているが、私たちが講師になっても良いので、誰もが住みやすいまちづくりのためにどうことができるのかという出前講座を、小学校などを訪ね子どもたちの声をすくいあげる形で考えていけると良いのではないか。社会福祉協議会でも何か考えや、アイデアがあれば教えてほしい。

社協管理  
部長

概ね同じような考えを持っている。ボランティア・区民活動センターでは、出前講座として学校へ赴く機会があり、アウトプットとして子どもたちに向けた発信はするが、子どもたちからすくい上げる取り組みは積極的に行っていなかった。

中高生向けワークショップについては、社会福祉協議会では以前より夏休みを使いボランティア体験に参加していただくイナっこ教室という取り組みを行っている。こちらはかなり盛況で、何百人という方、特に学生が多く参加しているが、ワークショップと同様にフォローアップができていないのが積年の課題である。若い世代の方と触れ合う好機でありながら、その後の事業につながっていない。委員の意見も踏まえ、今後少し力を入れ改革する必要があると思っている。

部会長

これまでの意見で共通しているのは、ワークショップの持ち方として見知らぬ人たちが集まりアイスブレイキング、気軽に話せる雰囲気にする、併せてどのような課題が地域にあるのか、あなたの考える住みやすいまちなど、そうした意見をみんなで書き出し、集めていく。多くの場合、それを整理し発表すると時間が終わってしまう。問題は、どのように解決するか。なおかつ、それを見える化することも必要である。

難しいかもしれないが、こうした問題があったときにどうやって解決するか。例えば付箋を使って多い意見を可視化し、具体的な解決方法を検討する。なおかつ、それを自分の地域に持ち帰り実験してもらおう。実験というと誤解を受けるかもしれないが、ある種の実験を自分たちなりにやってもらい、こういうところできた、できなかった、難しかった点を各々メモして、3か月後、半年後に集まりみんなで議論し問題解決に向けた道筋が具体的に見えてこない、地域住民のモチベーションも上がらないだろう。できればそうした形で、ワークショップのあり方を検討してみる。

また、今までのような伝統的なやり方というよりは、少し異なるやり方を社会福祉協議会を中心に工夫してもらおう。新しいワークショップはそれ自体が一つの実験なので、区や社会福祉協議会の方で評価し、これが良い、こうした方が良いと考えていただきたい。

参加者をどうするかという点については、各委員が様々な形で表現していたが、要するにすそ野を広げないと同じメンバーではいずれ限界が来てしまう。できる限り若い世代の人たち、

子育て世代とか従来なかなか参加に至らない人たちに、いかにして参加していただくか。そのためのツール、手段を検討しなければならない。

委員からは、デジタル技術の活用に積極的に取り組んでいくこと。特に学齢期、若い人たちはデジタル世代なので、そうした人たちに参加してもらうのであればデジタル技術の活用に区として積極的に取り組んでもらいたいとの指摘があった。

私も Twitter で東京都をフォローしており、投稿を頻繁に見かける。関心があれば詳細も確認している。Twitter などを介して若い世代に情報が広がっているのは確かである。

また参加しやすい雰囲気づくりとして、高齢者ばかりの中に参加するのは心理的抵抗が多いかもしれないので、その点も工夫していただきたい。

講師を務めた委員が指摘していたように、次につなげることができないと不満がたまり、参加者が減り行き詰ってしまう。そうなる前に次の手を考えるべきとの話だったかと思う。

他にはいかがか。

委員

月島と日本橋のワークショップを見学した。今回は防災をテーマとしていたが、グループで話の内容、話題はそれぞれ異なっていた。それがワークショップの良さだと感じつつ、課題の抽出で終わってしまうところもあると感じている。

話題にもなっていたが、もう少し小さい単位、参加者が我が事として捉えられる範囲で課題を投げかけ、解決に向け共に取り組んでいく、仕組みづくりを共に考えていく場が必要かと話を聞き改めて感じた。

先日、区内の主任ケアマネジャーの会が主催となり、私どもも協力してケアマネジャーと聖路加国際大学の学生も入り、30年後の中央区の支えあいについて考える機会を設けた。ベテランのケアマネジャーも大勢参加し、皆さん30年後はもっと大変になるのではないかと、どうすればよいのかなどワークショップと同じような意見が多かったが、学生はどちらかというとポジティブな視点で意見を出していた。例えば ICT 機器がより高齢者にも使いやすいものとなり、今よりも便利な生活ができるようになるのではないかなど、前向きな意見を出していた。そうした意味で中高生のうちから考えていく、そういう機会を設けていうのはすごく大事だと、参加して感じたところである。社会福祉協議会の職員、地域福祉コーディネーターとして常にそういう視点を持ちながら取り組んでいきたい。

(3) 令和5年度地域  
カルテの更新について

部会長 事務局いかがか。

管理課長 ワークショップの実施方法がこのままで良いのかは、事務局としても課題として感じている。そのため、来年度はフォローアップ会と中高生向けのワークショップという新たな取り組みを行うが、それを次のステップにつなぐことが難しいところではある。皆様のお知恵をお借りしながら取り組んでいきたいと思っている。

部会長 議題(3) 令和5年度地域カルテの更新について、事務局より説明を求める。

管理課長 資料3について説明。

部会長 ご質問、ご意見はあるか。

委員 地域カルテは私たち民生委員や町会長も貰っていると思うが、貰っただけで日々の活動に生かしているかということ、そうではない気がする。例えば町会長などから、地域カルテの活用方法など、伺っていたら教えていただきたい。

部会長 事務局いかがか。

管理課長 何かちょっとしたことで、確認したい点があった際に使っていただきたいと思っている。地域にこうした資源があることを知っていただく一つの資料として活用いただきたい。

地域振興課長 町会長の皆さんは、地域の色々な相談を受けていらっしゃる、日々お話をさせていただく中で感じている。本当に細かい相談まで受けていただいているので、そういったときに、「ここにこんな施設がある」とか、「こんな活動がある」など、この地域カルテを参考にご案内いただいているのではないかと考えている。

また高齢者の割合とか、そのうち要介護状態にある方がどれくらいいるかなどのイメージを持っていただくことで、イベントを行う際などの基礎資料にさせていただいていると考えている。

部会長	他にあるか。
委員	この地域カルテは良くできている。これを町会に配布して、テーマを決めてみんなに意見を出してもらうのも良いかもしれない。
部会長	<p>先ほどの委員のご質問は、具体的な利用マニュアルを示してほしいということだろう。</p> <p>地域カルテを作成し、色々な人に配布してそれで終了ではなく、もう半歩、一歩進み、活用事例が上がってきたらそれらの情報をこまめに集めて、簡単な利用マニュアルを作成する。こうしたケースで使えるなど、Q&amp;Aのようなマニュアルを配布してもらえると、町会役員や民生委員が見た際に、こういう風に活用すれば良いのか、と参考になるだろう。作成して終わりではなく、これをどう活用するかということまで踏み込んでもらいたいという意見かと思っている。</p> <p>他はいかがか。</p>
委員	<p>検討いただきたい事項として、資料3のP.2 NPO 法人について、地域カルテの最後に協働ステーション中央の URL を掲載する際、大変かもしれないが分野別に掲載していただけるとありがたい。</p> <p>理由としては、協働ステーションの団体一覧を見ると、全法人が PDF で一覧表示されている。そこから住民がつながりたい NPO を探そうとしても、探す気はたぶん起きない。保健・医療分野、福祉分野、子育て分野などジャンルはそれぞれあると思うので、複数分野にまたがる事業は主たる事業に分類した上で、URL や二次元コードを掲載してもらえるとわかりやすいと思う。ぜひ検討してほしい。</p>
部会長	事務局いかがか。
地域振興課長	協働ステーションのホームページについては、最近作り変えたところである。これまで団体の登録情報を更新しておらず、活動分野ごとの分類もしていなかったもので、子育て、高齢、障害など大きなジャンルだけでも少しずつ目出しできるように考えている。
委員	ぜひよろしくお願ひしたい。

部会長

他はいかがか。

継続は力なりという格言があるが、ぜひこうした努力を、情報交換を続けてより使いやすいシステムにしてほしい。また繰り返しにはなるが、活用方法も使い勝手がいいものを考えてほしい。

本日発言が無かった委員からも、全体を通してご意見ご質問があれば伺いたい。

委員

先ほどの地域福祉ワークショップの話に関連するが、障害のある方の一人暮らしについて、現在中高生の方たちも将来一人暮らしをするかもしれないが、同じ一人暮らしでも障害当事者には少しハンディがある。こうした支援があると暮らしやすいなど、障害当事者の困り事を理解した上で、自分だったら何ができるか中高生のうちから一緒に考える場や機会があると良いと思っている。

一番怖いのは関心がない事ではなく知らないことである。接点があれば少しずつ理解することができる。こういう生活をしている方もいるんだとか、親亡き後とか、親御さんも心配になっているところと一緒に考えてくれる仲間が地域にいと、参加者にとっても有意義な、地域で何かしていこうとする視点が出てくるかもしれない。

また、障害のある方を支援する中で、ヘルパー不足が課題となっており、どういう担い手が地域にいるのかという点が、切実な問題となっている。障害分野として、地域で支えられる社会資源、地域住民の協力があると、少しでも暮らしやすい生活、障害のある方にとって過ごしやすい生活を営める未来へとつながるだろう。そうした取り組みが広がれば、障害のあるお子さんや、高齢者にも派生できるのではないか。

基幹相談支援センターとしても、発信する機会、知ってもらい機会を持ちたいと思っているが、一つの機関ではできない部分があるので、皆さんにお力添えいただきながらできる取り組みを行いたいと思っている。

部会長

ありがとうございます。他の委員はいかがか。

委員

防災がキーワードとして挙がっているが、先月地域の方から防災について不安を抱えていて、おとしより相談センターと協力して支援が必要な高齢者がどこにいて何が必要なのか、おと

しより相談センターの職員から話を聞き、一緒に動きたいとの相談を受けた

中央区には災害時地域たすけあい名簿があるが、個人情報の問題から活用したくてもできないところがある。個人情報を保護しながらいかに住民の不安と向き合い一緒に何ができるのか考えることは、今後取り組まないといけない点である。

また、ワークショップでは、防災、地域を切り口としていたが、例えば高齢者自身の目線を見たとき防災はどのような景色として映るのか、先ほどの委員の意見のように障害者の目線で立った時に防災がどのように映るのかは、それぞれの世代や置かれている立場によって見える景色が異なると思う。そうした切り口から地域の中で、ワークショップでも良いし様々な形で話ができる場があると良い。

最後に交流について、障害者向けのサロン、憩いの場がないのではないかと指摘があったかと思う。おとしより相談センターは65歳以上の方を対象にしているが、障害をお持ちの方は看板を掛け替えるように高齢者になるのではなく、障害を持ちながらそのまま高齢者になっていく。その時に支援の壁があり、状況が私たちにはわからず、うまく拾い上げることができない点がある。例えばそうした交流の場に私たちのような高齢分野の職員とも接点を持てるようなふくらみを持たせることができれば、重層的支援体制整備事業においても話が上がっていたが、現場により近いところで横のつながりをつくることも一つ考えても良いのではないかと個人的に思っている。

部会長

貴重なご意見をいただいた。ヘルパー不足の問題はどの地域でも深刻であり、社会資源開発をするか考えていく必要がある。また私の大学にも言えることだが、障害を知らないという課題もある。だからこそ、そこから様々な問題が生じてしまう。いかにして正しく障害を伝えていくかなど、重要な話をいただいた。最後の意見は、まさに地域共生社会の実現に向けては、お互いどういう立場で、どのような風景を見ているのか、ということをお互いが理解し合うということである。

委員

お互いが知ることが大事だと考えている。

部会長

障害のある方との交流が話題となりはじめ、今度は児童の話から生活水準へと話が広がり、色々な人たちが交流していくことが、文字通り地域共生社会を指している。本部会では、そう

#### 4 閉会

委員	<p>した社会の実現に向けた議論を交わしている。委員のお知恵を拝借して、少しずつ前へ進んでいけると良い。最後に、委員から一言まとめの言葉をいただきたい。</p> <p>地域福祉ワークショップの進行役を務める中で課題が多いと思っており、本日議論した内容は全部自身への反省に戻ってきて来ているところもある。今後はぜひ世代を超えた議論、高齢、障害、児童みたいな分野別でもなく、福祉と防災みたいな分野別でもなく、また高齢者、中年、若者みたいな世代の断絶もなく、みんながフラットに地域のこれからについて語り合えるような場を作っていきたい。また、その場で語ったものが一つの成果、取り組みにフィードバックされるような場づくりを、この事業の中でも取り組んでいてもらいたいと思っている。</p> <p>来年もこの部会では重層的支援体制整備事業のことを検討するようになるので、そうした話を引き続き行いたい。</p>
部会長	<p>それでは、本日の議事はここまでとする。</p> <p>本日いただいたご意見を踏まえ、事務局で引き続き検討し、次回の専門部会で改めてご協議いただきたい。</p> <p>最後に事務局から何かあるか。</p>
管理課長	<p>会議の時間内に発言できなかったご意見については、意見票に記載の上、2月24日までに郵送、メール、ファクスなどでお送りいただくようお願いする。</p> <p>次回の専門部会については、令和5年7月頃を予定している。日程が決まったら、改めて事務局から案内する。</p>
部会長	<p>それでは、令和4年度第2回地域福祉専門部会を終了させていただきます。</p>
部会長	<p>閉会の挨拶</p>